

Title	郷土會記録(柳田國男編, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.2 (1925. 5) ,p.146(306)- 147(307)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石川縣能美郡に行はれたる民謡を、編者が塵の都のこの東京において偶然かくばかり多數に採集し得たことは、驚異すべきことである。巻頭には柳田國男氏の序文があつて、民謡に關する多くの興味ある問題と示唆を與へらるゝのであるが、更に本集の民謡そのものに接して、種々の感興の湧き出づるのをおぼえる。蓋し吾々は民謡によつてかゝる民謡を生みだした村の生活にふれることが出来るからである。僅か一行の歌にも戀の涙のかゞやきを見、一片の童兒の歌にも自然に對する人間の純情を感じる。殊に本集における『兄妹しんじゆ』のごときは戀愛の一大悲劇であつて、新しい戯曲にしくんでもおもしろからうと思はれるが、更に評者にまつて興味のあるのは、この物語における假裝の問題である。臺灣の生蠻には、母もしくは妹が假裝によつてその子もしくは兄を欺いて相婚する傳説が多數に存在する。而してこの場合は近親相婚の成立であり、『兄妹しんじゆ』はその否定であるけれども、假裝によつて對者を欺くといふことは兩者共通であり、これと關聯して、三輪山の傳説やキュービド神話におけるがごとき、姿をかくして女のもとに通ふといふ戀愛物語も想起される。さうして『兄妹しんじゆ』が女萬歳から傳へられたと註に言へるごとき、かかるグドキ類の民間叙事詩は、或時代に或處で實際に起つた事件が無名詩人の手によつて詩につくられた後日旅から旅へ傳へられたものであらう。本集の『おさち清三』のごときは、評者の故郷においても盆踊音頭としてうたはれるものである。編者はなるべく他地方との類似歌をばぶくにつとめられたと言はるゝものの、しかもなほ二三類似歌の發見せらるゝのは、特定の作

者の判明せざる、この意味において普遍性のつよい民謡の性質としてやむを得ないであらう。むしろ吾々はこれによつてその歌の分布範圍や地方地方の古い交通關係を知り、類似歌の比較研究からその原型をもとめ得ることとあらうし、またその土着化程度によつてその地方の特色をうかがうこともできる。要するに本集に収録された長短二百數十首の歌はいづれも北陸の數村の人々によつてうたはれた地方色の豊かなもので、世の民謡愛好家並びにそれによつて村の生活を知らうと欲する人々には是非一讀をすゝめたい。

(松本芳夫)

郷土會記錄(柳田國男編)

大岡山書店發行

本書は新渡戸博士や本書の編者を中心として明治四十三年より大正八年まで存続した郷土會のその時々記録を集めたものであつて、それぞれの記録は話者が親しく觀察したる村の話、或はそれに關係ある事項の研究である。海幸の村、山幸の村、幽靜な溫泉村、信仰のために起つた村、或は都市の周圍にあつて絶えず急激な變化をうけつゝある郊村、或は水害になやまざるゝ村、或は罹災民の開いた新部落、或は遠くはなれた島の話、或は村開墾の話、民間信仰の話、或は滅びた江戸の舊事談、或は黒川能や刀鍛冶の話など、いづれもとりとへつきざる興味をそゝり、有益な知識を與へるのである。これら二十編の話はすべて各方面の學者の精確なる觀察談であるから、それぞれの村の組織、行政、産業、或は風俗習慣等の生きた資料であつて、村の經營者によつて他山

の石もなり、村の觀察者によつての好手引書であり、一般讀書界にとつての生きた地理書である。さうして各編中に地圖を挿入されたことも、編者の用心がしのばれてうれしい。

一體人間の生活はいつの時代、いつどこにおいても土に即したものであつて、この土の上に大小の集團をなしてゐるのである。さうしてその土地の状態如何によつてその集團の形式や發達が非常に異なるのみならず、その集團の人々の性格や生活様式までその影響をうける。海岸の村、川ぞひの村、山間の村、平原の村は、それぞれその聚落の方法が異り、その發達に特色がある。人間の生活を知らずには、あはせてその土地の研究を怠つてはならない。人間と土地との不斷の闘争が人間生活の大きな部分をなしてゐる、しかもそれが郷土の研究によつて最もよく具體的に示さるのである。郷土研究の意味と興味は、こゝにある。本書を生んだ郷土會のごとき、本書をもつて唯一の紀念品として滅びてしまつたのはまことに惜しく、日本の社會に是非存續してほしかつたもの一つである。

(松本芳夫)

朝鮮民族統譜

尹昌鎭 著
漢城圖書株式會社發賣

本書は朝鮮の氏族志とも見るべき書である。先づ朝鮮の諸氏族をその姓に隨つて——金とか李とか云ふ風に——分類し、各姓に就いてその朝鮮に何本あるかを示し、又姓源を總論してある。姓源は多くの場合支那にあるので此の總論は支那の文獻の上の調査になつてゐる。次にその姓に屬する諸氏を本貫を異にするもの

ごに列擧して、始祖と後孫中の名人を示したものである。附録に『中國姓氏考』がある。兩班世家が勢を振つた半島の歴史を研究するには、參考書の一たるを失はぬ。此の書の凡例を見るに、著者は、すべて文字があつて然る後姓氏がある、朝鮮には素文字がなかつたが、之を支那から輸入するに及んで、又姓氏を輸入したと云ふ意味のことを述べてゐる。之によるに、史上數多の漢人が東來居住したと云ふことはあるが、兎に角諸氏の姓源と血統上の源とは必ずしも一致せぬことになる。著者は特に此の點を明にして、『如相國李奎報國子史業尹公哀辭曰、天水尹公諱威字某、蓋相國聞見、不知尹公之本、自坡平分籍南原、而曰天水尹公耶、此尹氏本少昊之裔、系出天水故、相國必於姓源貴之也、覽之君子、諒、應勿此姓氏族皆出於中國也』と云つてゐる。姓源と血統とが別個のものであり得ることは、余輩も誠に同感である。なほ著者が、贈人の文字の氏名の上には、その人の貫郷を記する場合と姓源を記する場合とあるとしてゐるのは、留意すべきことである。

(十四、四、五 高橋琢二)

藤田博士の「薩實について」を讀む

はつきりは覚えてゐないが、自分が最初に佛典の中に「薩薄」といふ難解な文字を見出したのはかなり以前のことである。それ以來、決して自分の腦裡からこの文字が逸出してしまつたわけではないけれども、語學の力の貧しさで不勉強のために最近にいたるまで疑問標のついた語彙の中に埋めてしまつてゐたのであ